

目次

報 告 No.2

報告 No.2 の発行にあたって	1
伊那松本山岳部発足から信大山岳会統合までの活動について	5
発 足	5
活 動	10
統 合	23
山行記録抜粋	33
35 年度から 53 年度山行記録	34
我が部と北海道の山々	131
初登攀記録	141
海外遠征の道のり	153
海外遠征の道のり	154
海外遠征記録抜粋（各遠征隊記録集から）	156
隊員派遣遠征 サンタ・クルス・ノルテ峰初登頂	172
特別寄稿	177
大学山岳部考	178
山田哲雄先生を偲んで	185
各年度リーダー部活動の記録	191
思い出、雑感、エピソード	219
追悼 山岳遭難者 病没・事故者	257
年度別山行記録（昭和 24 年度から昭和 53 年度まで）	321
信州大学山岳会歴代会長・伊那松本山岳部顧問教授	322
地域別山行記録（昭和 24 年度から昭和 53 年度まで）	366
個人海外登山・トレッキング	380
思い出の写真集	381
編集後記	392

Preface

By Mitsuaki Nishikori

This book is the report vol.2 about the mountain climbing activities of Ina/Matsumoto Alpine club of Shinshu University from 1960 to 1978. In passing, the report vol.1 had already been published in 1960.

Shinshu University is a national university in Nagano pref. which is positioned roughly in the centre of Japan and colleges are mainly scattered around four areas (Ina city, Matsumoto city, Nagano city and Ueda city).

Therefore, activities of mountain climb had been separately divided into four groups until when these groups were brought together and became one big club as 'Shinshu University Alpine Club' in 1978.

In the previous movement of each group, the students in Ina College and Matsumoto College formed their partnership for mountain climbing and virtually acted as one club before 1978.

This publication is the record of Ina/Matsumoto Alpine Club until being consolidated to Shinshu University Alpine Club.

Japan Alps Peaks were widely introduced to European countries by Walter Weston who was an active member of the Alpine Club of Great Britain. Japan Alps Peaks stand Nagano prefecture and surrounding prefectures, and the landscape captures our heart indeed.

For the students like us who spent own college life at the foot of these mountains, there was no reason not to be fascinated with the amazing mountains. As Walter Weston said, Japan is a beautiful country because the four seasons are very clearly defined. Sometimes it brought us grueling experiences. However, we really enjoyed climbing during the college days.

Most of records in this book are about activities in Japan Alps, particularly Northern Part of Japan Alps, and it partially contains the record of activities of mountain climb in Hokkaido, Northern part of Japan and Tohoku, North-east of Japan.

In addition, there is a short mention of activities abroad from 1960 to 1978 in this book. The formal report for this has been published individually. You can also see the report on the website of Shinshu University Alpine Club. Please find the website address and contact in the last page of this book. We will appreciate your frank comments on this book.

I would like to take this opportunity to thank Mr. Katsuhiko Okamoto, the president of KWIX Co., Ltd., who was involved in the preparations for publishing. He is also a graduate of Shinshu University and my best friend.

Chief Editor

報告 No.2 の発行にあたって

編集委員長 西郡光昭

やっとのことで報告 No.2 をお届けできることになりました。No.1 の発行が昭和 36 (1961) 年 12 月でしたから、じつに 45 年ぶりということになります。No.1 は、旧制松本高等学校山岳部から信大文理学部山岳部へ移行した昭和 24 (1949) 年から、同 31 (1956) 年の文理学部と医学部各山岳部の合併による信大松本山岳部の発足を経て同 35 (1960) 年冬山合宿までが内容でした。それまでの間の経過や登山活動についての先輩各位の健筆によって、その活躍振りが目に見えるようで現在でも胸おどらされる思いがします。

旧号が発行の昭和 36 年は信大松本山岳部にとって大変な年でした。本号にも一部掲載されていますが、36 年 4 月の穂高吊尾根で伊藤、岩本両先輩を失うことになったからです。両先輩は、伝統を誇るわが松本山岳部の押しも押されぬリーダーでしたから、新人で仔細を十分呑みこめない私にもことの深刻さが十分伝わるほどの大きなショックでした。

信大松本山岳部は、その後、昭和 36 年農学部学生で構成される信大伊那山岳部と合併し信大伊那松本山岳部になりましたが、さらに昭和 41 (1966) 年度から信州大学山岳会伊那松本山岳部となりました。同じ年に工学部、教育学部が信州大学山岳会長野山岳部、繊維学部が信州大学山岳会上田山岳部となって名称の統一が図られ、昭和 53 年度からは各山岳部を廃止して大同団結し、実質的な信州大学山岳会（いわゆるオール信大）として一つの組織体となり今日に至っています。

報告 No.2 は、上に述べた昭和 36 年 4 月の事故以来、昭和 53 (1978) 年の信州大学山岳会誕生までの約 16 年間の伊那松本山岳部の歩みをまとめたものです。この間、一時は記録の収集に取りかかったこともありましたが、「ズクなし」が高じてまとめ上げることができませんでした。その当時頑張ってくれた人たちには深くお詫び申し上げます。

ということで今回の記事は「遠い昔の物語」の感じはありますが、振り返れば、この間、現役の山行にもさまざまな変化があり、いく度かの遭難で古い仲間をも失いました。また、熱意押さえがたく現役を誘って海外の登山に出かけるようにもなりました。遅れてしまいましたが、この度、これを記録として残すことは大いに意義あることと考えた次第です。時間が経ちすぎて必要な資料の収集、記憶の呼び戻しには限界がありましたが、皆の努力で何とかここまでまとめることができたということでお許しをお願いしたいと存じます。

現在、オール信大としての記録は各山岳部の資料を、古いものも含めてできるだけ集め、多くの人に見てもらえるようデータベース化が進んでおり、信州大学山学会のホームページでご覧いただけるところまで来ております。これは現在も各学部の OB 有志が相つどい進められている学士山岳会の事業です。

この度の報告 No.2 発行に当っては伊那松本山岳部 OB の若手と古手が大変な精力をかたむけてくれましたが、原稿執筆をお願いした方々、経済的なご支援をいただいた皆様にも厚くお礼を申し上げて発刊のご挨拶といたします。

追伸 本誌編集に全力をかたむけてくれていた名古屋の小川 勝さんが、その最終段階の本年 1 月 26 日急逝されました。ここに、彼のご尽力に深く感謝し、ご冥福をお祈り申し上げます。

2007 年 6 月

信州大学学士山岳会会長挨拶

会長 宮崎敏孝

信州大学山岳会伊那松本山岳部の山行活動記録『報告 No.2』の編集が鋭意推進され、刊行を実現する経費の捻出を検討する段階に至りました。

編集委員長 西郡光昭の「挨拶」に記されているように、『報告 No.1』の刊行から 45 年余の歳月を経る“大々難産の結晶”になりましたが、この『報告 No.2』の刊行を編集委員、執筆者、記録資料・保存提供者および学士山岳会会員各位と共に慶祝したいと考えます。

保管されていた印刷物を見ると、昭和 38（1963）年度以降の数年、年度当初の部員役割分担に「『報告 No.2』編集担当」の字句があり、当時部員の間是相当の“想い”が継承されていたことが思い出されます。

昭和 42（1967）年の 4 名の現役部員によるネパールワンダリング（参照：海外遠征記録抜粋）の成果を礎に、昭和 44（1969）年 OB 会が主体となって推進した、『創部 20 周年記念事業』としての海外登山計画とその実施に活動の重心が移り、『1971 アンナプルナ II 峰』が刊行された昭和 47（1972）年 12 月まで『報告 No.2』は“小休止”になっていました。

昭和 48、49（1973、74）年に岡村知彦（S37 入部）が『報告 No.2』の刊行完遂の意欲満々で、“鬼軍曹”と化し、原稿執筆、提出の督促に大奮闘したのですが、各年度のリーダーによる活動総括稿がほとんど提出されず（この度の編集作業開始後、ダンボール箱 2 個の原稿・資料が送付されてきて、当時約 70%の原稿・記録が整理・保管されていたことと未提出原稿の内容が判明）、“休眠”状態に突入してしまった経緯も明瞭にされました。

平成 14（2002）年 4 月、信州大学山岳会、同学士山岳会の電子メール ML（harusekiryou:春寂寥）に、ワード文章化された過去の記録（200 枚弱、未完成）が添付ファイルとして送信公開されました。松本のプレハブ部室に保管されていた印刷物記録が保存継続困難な“劣化”状況にあることを憂えた現役部員、花谷泰広（H7 入部）、大木信介（H9 入部）、岸本俊朗（H9 入部）、横山輝生（H10 入部）の 4 名の共同作業の結晶でした。作業の困難さを突破して入力エネルギーを集中させた起点は“部員の減少”傾向を改善しようとの熱情でした。

すなわち、信州大学山岳会の継続と展開を支える根幹は部員の存続であり、“減少対策の一策”として山行活動記録をホームページ（HP）で公開・広報することを意図する“時代の技術”を駆使した“若い発想”の OB 達への問題提起でした。

平成 14 年秋より、学士山岳会の事業として「山行記録の電子文章化」に取り組むことを決定しましたが、入力作業が“大きな壁”となり、早急な対応手法として既印刷物を“PDF 化”する方式に方針を転換し、山行記録のホームページ公開が実現しました。花谷君の“時間と技能”の提供を受け、信州大学のホームページのトップページ：キャンパスライフ ⇒ サークル情報：体育系サークル ⇒ 全学組織サークル ⇒ 信州大学山岳会への検索手順で創部以来の印刷物になっていた記録の閲覧が可能になっています。

この作業の進行過程で、「編集後記」で記されているように松尾武久（S36 入部）の“長年の想い”が再発火し、“執念の松尾”に呼応して『報告 No.2』を再度編集する伊那松本山岳部 OB のエネルギーが結集しました。“印刷物”を丹念にファイル保管されていた奥島啓志（S35 入部）や山行時の詳細な行動記録を保存されていた出島五郎（S35 入部）、駒井浩（S37 入部）からの資料提供など、編集に直接参画した OB、ほか多勢の OB からの『報告 No.2』刊行への“様々な想い”が結晶できたことを心から嬉しく思

います。

信州大学山岳会長野山岳部の山行活動記録は既に、『信稜』（田島守編）として平成10（1998）年5月に刊行されています。また、信州大学山岳会上田山岳部の山行活動記録についても、資料・原稿の約80%が集積されているとの伝聞ですから、この『報告 No.2』の刊行が“契機”となって、近々“信州大学山岳会の山行活動記録の全容”を公開できることになると期待しているところです。

『報告 No.2』の編集に係わられた関係者の“膨大なエネルギー”の提供と刊行を実現するための経済的支援を抛いただいた会員の皆様に、心からのお礼と感謝の意をお伝えして、刊行に当たる会長の辞いたします。

2007年6月

伊那松本山岳部発足から信大山岳会統合までの活動について

発 足

松本山岳部リーダー 山田和彦

当時、信州大学には文理学部、医学部、農学部学生の松本山岳部、教育学部、工学部の長野山岳部、繊維学部の上田山岳部があり、それぞれ独立して活動していた。農学部の部員は少なく、伊那へ移っても、ときに松本の山行に参加していた。昭和35（1960）年度は13名の新入部員をむかえたが、そのうち10名が農学部の学生であった。36年度には葛西らと新たに伊那に移った部員が伊那山岳部を立ち上げた。一方、松本は35年度最後の春山合宿の遭難で岩本、伊藤を失い、36年度は部の建て直しが急務であったが、部の中核となる2年部員のほとんどが伊那に移り、また、多くの新入部員（ほとんどが農学部の学生）をむかえ、部活の多くをその教育、訓練にあてなければならず、2年以上の部員の希望する山行はかなり制限され、しかも1年たてばその1年部員のほとんどが伊那へ移るというくり返しになるのは目に見えていた。その状況を解決するには松本と伊那が合併するしかなかった。その件について話し合いをもったが、もともと同じ釜の飯を食った仲間であり、その後も交流があったので、すんなりと合併がきまった。

伊那山岳部リーダー 葛西正美

昭和34（1959）年に松本山岳部に入部したのは、文理学部2名、医学部1名、農学部3名の計6名であった。2年生になって、伊那に移ったとき、農学部山岳部は2名の部員しかおらず、山岳部としての行動はなく、山行記録、OB会名簿等の記

録も存在していなかった。

仕方なく葛西、主計の2名は、農学部山岳部に所属せず、松本山岳部員として山行、合宿に参加していた。

昭和35年の新入部員は、文理学部1名、医学部2名、工学部1名、農学部10名の計14名であった。この年次の部員が2年生になったとき次の問題が出てきた。

- ①松本山岳部の2年部員が激減する。
- ②農学部山岳部は実態が無い。
- ③松本山岳部に所属したままで山行を続けることは、人数が多くなって問題であった。

葛西は農学部山岳部の人達と学校関係者、それに知りえたOBにも意見を求めたが、応答は無かった。

この件について、親身になって相談に乗ってくれるのは松本山岳部のメンバーであった。山田・伊藤・岩本の諸氏と話し合い、伊那・松本の合併を視野に入れて行動することになった。ただし、あくまでも農学部に移る10名の2年生の意思も確認し、同意を得たのち伊那山岳部を発足したのである。

伊那山岳部は原則として松本山岳部と行動をともにし、山行も出来る限り合同で行うこととした。

昭和36年は、10月の秋山岩登り合宿までは伊那山岳部として行動したが、冬山合宿から合同で行うことになった。

昭和37年は、5月12日付けで綱領、部則を定め伊那・松本山岳部が発足した。

伊那松本山岳部初代リーダー 西郡光昭

これまでそれぞれ単独で部活動を続けていた信

大松本山岳部と伊那山岳部が合併し、一つの山岳部としてスタートしたのは昭和 37（1962）年度からである。

この合併はもちろん突然の出来事ではなかった。すでに述べられているように¹⁾、遭難のあった 35 年度春山山行は実質的に伊那、松本の合同合宿であったし、36 年度も両山岳部合同の合宿が数回もたれている。また、その他にも各山岳部の合宿に個人的に参加し、交流を深めるという基礎がそこにはあったわけである。

合併が具体的に検討されることになったきっかけは、昭和 35 年 4 月農学部に入学者 12 名が松本山岳部の新入部員として入部したことであつた。

もともと信州大学は、全国でも有数のたこ足大学といわれるほど各学部が長野県内に分散しており、そのうち農学部学生は教養課程の 1 年間を松本市ですごし、2 年目からは伊那市郊外の農学部に移って専門課程の履修にはいるという変則的な制度になっていたものである。

このようにして多数の新入部員が 2 年目からは伊那山岳部に移るとなると、引き続いて松本山岳部に残る部員が少なくなる。翌年ふたたび同様の新入部員の入部があると、松本山岳部はあたかも伊那山岳部の新人養成担当の役割を担うことになり、中堅、上級生部員の山行に大きく影響すると考えられるようになった。

一方、伊那山岳部にあつては、言葉は悪いが必ずしもまとまりのある活動をしているとはいい難い状況にあつたので、従来から両山岳部部員間の交流があつたことでもあり、この際両部を合併し組織を一本化することが問題の解決につながる、との意見が強くなることとなった。

そうはいいながら、合併を考える際の課題がないわけではなかった。昭和 36 年度の部活動は、前年度の遭難の反省と松本山岳部の建て直しという課題があり、一つの山岳部の仲間が松本市と伊那市とに分かれて生活している状況では、バスで往復 3～4 時間かかる（当時）距離的ギャップのある中で部員の人的交流をどう図るかという問題

がでてくるのも当然のことであつた。

これらの問題のうち前者については 36 年度活動報告でふれられているので²⁾ 詳述しないが、人的交流については双方が可能な限りの努力をすることを確認しあい、昭和 37 年 5 月に西駒演習林宿舎での会議を機に信州大学山岳会・伊那松本山岳部が発足することになった。

こうして誕生した新山岳部の役員構成はチーフ・リーダーのもとに 2 名のサブ・リーダーを松本、伊那にそれぞれ 1 名ずつ置き、新人養成担当を新設したほか各係とも両地区にそれぞれ配置することとして、連絡・調整が欠くべからざる作業になるように配慮された。

昭和 37（1962）年度のリーダーには西郡光昭、小谷雅宣、寺田雅治の 3 年部員があたり、この大変な仕事をすすめることになったが、この一年をふり返ってみると、なんとも無我夢中で余裕もないまま走り終わったというのが実感である。リーダーがいずれも 3 年部員という経験のなさもさることながら、37 年度は 30 名もの新入部員がはいつて山岳部が一段と大所帯になったうえ、松本と伊那との連絡調整を怠るわけにはいかず、部をリードする余裕などもなく新しいことは何もできない一年が過ぎたと悔いが残るのみである。

しかしながら、なんとか一年をやり通せたのは、同じ 3 年部員仲間の支えがあり、後輩の大変な熱意があり、そして先輩のよき指導があつたればこそと思うと感謝の言葉もない。特に、合併へのアプローチとしての合同山行を積み重ねられた先輩の努力と合併に際しての卓見にはただただ敬服の至りである。

進学課程で留年した西郡は、一時期、本拠地の松本市より伊那市で生活する日々の多かつたことがあつたが、部員全員が山岳部をもちたてていこうという意欲に満ちていた当時は懐かしく思い出すのである。

注 1) 「1960 年度春山遭難報告」 信州大学山岳会松本山岳部（1961.5）

注 2) 「36 年度部活動を振り返って」

山岳部綱領

昭和 36 年春山の遭難に対して、徹底的に原因を追究し分析し、再びこのような事故を起こさないことが我々部員に課せられた重大な使命であり、また彼等の死を無駄にしない唯一の道であると考えた。

我々は今までの部生活全てを十分反省し、新たな決意のもとに再出発しようとしている。この決意を忘れたら再び遭難の起こるのは必至である。この反省と決意を部員全員が常に意識し実行するために、ここに成文化し永久に部員の心がけとする。

1. 部は組織である以上、各人が他人に迷惑をかけない一定の技術（部生活上にわたる広い意味での）を身につける。
2. 基礎技術を習得せずして、高度な段階に進んではいけない。特に滑落停止確保(コンテナスを含む)、アイゼンおよびピッケル技術を十分にマスターすること。
3. 状況判断をする目を持つよう常に心がけること。
 - a. 天気図を書き、それと勘により天気予想ができる
 - b. 雪崩、落石に対する判断
 - c. ルートファインディング
 - d. 隊員および自己の体のコンディション
 - e. 自分の実力とルートの難しさ
4. 常に余裕を持って行動する。
5. 高度の山行に対して、それに対する十分の備えが無い者には参加拒否が出来る（リーダー会）
6. 個人山行は総会、部会またはリーダー会の承認をうけること、山行後は必ず報告書を提出すること。
7. 山行に対しては用意周到な計画と十分な反省を行わなければならない。いかに小さい事故といえども徹底的に批判と反省を行う。

昭和 36 年 5 月 13 日

信州大学山岳会松本山岳部

昭和 37 年 5 月 12 日

信州大学山岳会伊那松本山岳部

信州大学山岳会伊那松本山岳部部則

第1章 名 称

信州大学山岳会伊那松本山岳部と称する。

第2章 性格及び構成

信州大学農学部、医学部及び文理学部の山岳部を単位とし、三者とも各々独自の立場でその学生自治会に属するが、この部はそのいずれの学生自治会にも属さない統一体である。

第3章 顧 問

農学部、医学部及び文理学部の教官のうちから各1名ずつ計3名を選任する。

第4章 役 員

チーフリーダー

部の最高責任者であり、部の運営諸事を統括する。これは部の総会において選出する。

サブリーダー

チーフリーダーの補佐、チーフリーダー支障の際には、その任務を代行する。また各々は三者の代表者であり、各学部一名ずつ計三名選出する。

装備係

部の装備の保管、出入の監査等一切の責任を負う。また装備研究を行う。

会計係

部の会計に関する一切の事務を行い、その責任を負う。会計報告は5月、10月の総会において行う。

記録係

部生活の記録及び書籍の保管。

OB 係

OB との連絡交流を密接にする。

新人係

新人の指導計画の作成にあたる。

以上の役員は、毎年10月の総会において、部員中から選出し、チーフリーダーは1名、サブリーダーは3名、他の役員は伊那、松本から1名ずつ計2名、新人係は松本に1名選出し、任期は1年とする。特別の事情があって、役員に欠員を生じた場合は、総会開催のうえ、補選する。

第5章 総 会

1. 総会における決定事項は、部活動運営上最も有力なものである。したがって周到な討議を行うべきである。
2. 総会は全部員の三分の二以上の出席によって成立する（委任状は出席者の三分の一を超えてはならない）。
3. この開催は、チーフリーダーが行うが、チーフリーダーが必要と認めた場合、役員2名以上が要請した場合には開催するものとする。
4. 定例総会を毎月一回開催する。

第6章 部 会

1. 週一回定例部会を開き、その協議事項を直ちに交換し、次の部会での討議事項を決定する。
2. 部会は伊那、松本で各々開き総会に次ぐ協議機関である。

第7章 リーダー会

1. チーフリーダー、サブリーダー、新人係を持って構成し、部運営上の諸細末事項、その他諸問題について討議する。
2. 開催はチーフリーダーが必要と認めた場合及びリーダー会会員2名以上の要請があった場合行う。

第8章 装 備

1. 装備係が管理し次の帳簿の記載を行う。
装備出納簿（出納の都度、品目、ナンバー、数量、使用責任者、使用予定数、返還期日、点検状況）を記入する。
2. 装備目録（品目名、ナンバー、数量、購入年月日、修理年月日、消耗廃棄の際はその理由と期日）を記入する。
3. 管理は原則として各々の装備係が行う。
4. 装備使用の際は装備係の許可を必要とし、装備係の立会いなくして出納することは出来ない。
5. 購入品目は総会での決定を必要とすることを原則とする。

第9章 財 政

1. 各々の学生自治会からの配分金、部費、その他を財源とする。
2. この管理出納の責任は一切会計係にあり、出納諸事項を会計簿に記載する。
3. 部費その他については総会において決定しなければならない。

第10章 行 動

1. 総会において具体的事項を決定する。
2. 各々の地区の行動記録簿を設け記録係が保管する。
3. 山行記録は原則として、山行記録者が記載するものとする。

第11章 部員の義務

1. 部の名誉を傷つける行為をしてはならない。
2. 部活動に積極的に参加協力しなければならない。
3. 部費は必ず納めなければならない。
4. 個人山行は総会または部会またはリーダー会の承認を得なければならない。
5. 総会、部会には必ず出席しなければならない。やむを得ず欠席する場合は、チーフリーダー、またはサブリーダーに届け出、承認を得なければならない。
6. 部員は他クラブへ原則として所属できない。

第12章 除 籍

部員の義務に違反した場合は、リーダー会で検討し総会の承認を得て除籍される。

第13章 改 正

部則の改正はリーダー会で検討し、全部員の三分の二以上の賛成によって承認される。

補 則

各係が新旧交代する際には、各係の報告を総会で行ない正確に事務を引き継がねばならない。

以上の部則は、昭和37年5月12日より発効する。